

術三則

泉鏡花作

全一章

帝王世紀ていおうせいぎにありといふ。日の怪あやしきを射いて世よに聞きこえたる。二、嘗かつて呉賀こがと北きたに遊あそべることあり。呉賀雀こがすずめを指さして二に對むかつて射いよといふ。二悠然げいぜんとして問とうていふ、生これをい之乎さんか。殺これをころ之乎さんか。賀がの曰いわく、其その左ひだりの目めを射いよ。二すなはち弓ゆみを引ひいて射いて、誤あやまつて右みぎの目めにあつ。首かっへを抑おさへて愧はぢて終身みをはるまで不忘わすれず術じゆつや、其その愧はぢたるに在あり。

また陽州やうしゆうの役えきに、顔息がんそくといへる名譽めいよの射手しやしゆ、敵てきを射いて其その眉まゆに中あつ。退しりぞいて曰いはく、我無勇われゆうなし。吾われ其その目めを志こころざして狙ねらへるものを、と此この事こと左傳さでんに見みゆとぞ。術じゆつや、其その無勇ゆうなきに在あり。

飛衛ひゑいは昔いにしへの善よく射いるものなり。同おなじ時紀昌とききしやうといふもの、飛衛ひゑいに請こうて射しやを學まなばんとす。教をしへて曰いはく、爾ななぢ先瞬まつまたきせざることを學まなんで然しかる後のちに可言射しやをいふべし。

紀昌きやうこゝに於おいて、家いへに歸かへりて、其その妻つまが機織はたおる下もとに仰あをむけに臥ふして、眼まなこを二いて蝗いなこの如ごとき梭ひを承うく。二
年ねんの後のち、錐末すめまつ皆なりに達たつすと雖いへども瞬またかざるに至いたる。往ゆい
て以もつて飛衛ひゑいに告つぐ、願ねがはくは射しやを學まなぶを得えん。

飛衛ひゑい肯いずして曰いはく、未まだ也なり。亞ついでで視みることを學まなぶべ
し。小せうを視みて大だいに、微びを視みて著いちじしくんば更さらに來きたれと。
昌しやう、絲いとを以もつて虱しちみを二に懸かけ、南面なんめんして之これを臨のぞむ。旬じゆん
日じつにして漸やうやく大だい地なり。三年ねんの後のちは大おほき如しやりん車輪のこ焉し。

かくて餘物よぶつを靚みるや、皆丘山みなきうざんもたゞならず、乃すなはち
自みづから射いる。射いるに從したがつて、二盡りんく蟲ことの心むしを貫むなく。
以もつて飛衛ひゑいに告つぐ。先生せんせい、高踏かうたふして手てを取とつて曰いはく、
汝得なんぢ之これを矣えたり。得これを之えたるは、知しらず、機はたの下もとに寢ねて梭ひの
飛とぶを視みて細君さいくんの艶えんを見みざるによるか、非ひ乎か。

【完】